研究主題　「自発的・主体的に学校生活を送ることができる児童生徒の育成」

～支援体制を充実するための副校長・教頭の役割～

提言者：武雄市教頭会　武雄市立山内西小学校　　副島　泰子

１　主題設定の理由

武雄地区の小中学校では、各学校の実態や課題を踏まえ、特色ある教育活動の実践に努めている。教育活動の質をより高めていくためには、自発的・主体的に学校生活を送ることができる児童生徒の発達を支援していくための体制づくりにおいて、副校長・教頭としての役割が大切であると考え、本主題を設定した。

２　研究のねらい

自発的・主体的に学校生活を送ることができる児童生徒の発達に関する支援体制について、「学習支援に関すること」「生徒指導に関すること」「教育相談に関すること」の３つの視点で、武雄市における課題を把握し、支援体制づくりにおける副校長・教頭の役割を探る。

３　研究の経過

(1)　１年次（令和５年度）

①　研究主題、設定の理由、ねらいの検討

②　アンケート調査の実施と結果の考察

③　実践報告（中学校１校）と各学校の実践

(2)　２年次（令和６年度）

①　各学校の実践の共有（１回目）

②　実践報告（中学校１校・小学校２校）

(3)　３年次（令和７年度）

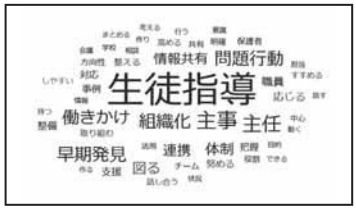
①　各学校の実践の共有（２回目）

②　まとめ（成果と課題）

４　研究の概要

(1)　アンケートの実施

武雄市教頭会アンケートでは３つの項目ごとに「上手くいった事例や具体的な取組」「支援体制における副校長・教頭の役割として大切なこと」の質問内容で、テキストマイニングによる分析を行った。



【資料１】テキストマイニングによる分析

①　学習支援に関すること

副校長・教頭は研究主任や教務主任と連携して、すべての児童生徒が学習に主体的に取り組み、学びを深めることができるよう支援することが重要であること。

②　生徒指導に関すること

副校長・教頭は児童生徒が学校生活を健全に送り、将来の社会で活躍できる人材へ育つことができるために、情報を共有しながら組織的な支援体制を構築し、外部専門機関との連携が重要であること。

③　教育相談に関すること

副校長・教頭は専門機関と連携することで、教職員の悩みや課題を把握し、解決策を提供する役割があること。

(2)　研究の仮説

アンケート結果を踏まえ、各小中学校の実践を基に、副校長・教頭として「学習支援に関すること」「生徒指導に関すること」「教育相談に関すること」の３つの視点で、武雄市における課題を把握し、支援体制づくりを整えることで、自発的・主体的に学校生活を送ることができる児童生徒を育成することができるであろう。

５　研究の実践

(1)　主に学習支援に関わる副校長・教頭の役割について

【小学校の実践】

①　実践内容

武雄市の小中学校では、教育DXを推進し、GIGAスクール構想の下で学校における基盤的なツールとなるICT機器を最大限に活用しながら、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることを教育の重点項目の一つとして掲げている。また、今年度は文部科学省指定のリーディングDX指定校となった４校が武雄市の小中学校の中心となって一人一台端末を使った授業改善をリードしている。

以上のことを踏まえ、武雄市では、すべての児童生　徒が学習に自発的・主体的に取り組む

ことができるような授業の実現における副校長・教頭の役割を探った。

② 副校長・教頭としての関わり

ア 学習環境の整備

「教員の集団づくり」「外部諸機関」「小中合同の取組」を生かした学習環境づくりに注力する。

イ 組織マネジメントの推進

多様な人材がそれぞれの専門性を生かして能力を発揮できるようにし、組織全体の資質向上を図る体制を整える。

③ 具体的な取組

ア 環境を整備する（予算の確保・企画・調整）

ICT機器を文房具として、学校や家庭においてシームレスな活用を実現する。

a 学習用端末バッグの購入

育友会に相談し、年度当初に保護者負担で購入。全校児童の名前タグをつけて、バッグに入れて机の横にフック掛けすることを統一。給食から掃除時間に毎日必ず充電し、児童がいつでも使いたいときに自由に学習用端末を使用できるようにした。

b マイク付きヘッドセットとマウスの購入

育友会費で購入。ヘッドセットは主に個別最適な学習の場面で使用。例えば、国語の音読練習や外国語のリスニング・音楽授業における自分の歌声や演奏の確認等。使いやすく、運びやすく、長持ちするようにケースに一つずつ保管し、ナンバリングをすることを依頼。自己の学習を調整する場面で児童が積極的に活用できている。

【写真１】 マイク付きヘッドセットの利用

c ICT機器使用ルールの徹底と見直し

情報推進リーダーと研究主任を中心に使用ルールを作成し、教員で検討調整。全校朝会で児童に周知した。対応すべき課題は、児童のスキルアップに伴って、どんどん出てくるので、教員は対応すべきことを見聞きしたら、情報推進リーダーに報告。学習部で対応を検討して週１回の連絡会で諮り、児童に周知した。取組が進むにつれて、児童のモラルの高まりを実感した。

イ 自立し、学びを止めない教員集団づくり

a 計画・連絡・調整

研究主任を中心に、年度当初に年間を見通した具体的な授業改善研修計画を立てるように指示した。研修には外部講師を積極的に活用し、内容の充実を図った。

b 見つけて、広げる

普段の教員の授業の様子を参観し、有効なICT活用を見つけて、他教員に広げる。また、情報推進リーダーが講師となって、10分程度のミニ研修会を実施した。ミニ研修会のみならず、放課後職員室で自然発生的にICTスキル研修が始まるようになり、職員個々のスキルが高まっていった。

c 学びを推奨する

書籍の紹介コーナー設置・事例集URLの共有

d 小中連携を推進する

中学校までにどんなスキルを身に付けておくべきかについて、中学校と共通理解を図る。スキルアセスメント振り返りシートを基に、現在の到達度を知り、今後の課題や目標をつかむ。

【写真２】 小中連携合同研修会の様子

e 授業相互参観と合同授業研

リーディングDX指定校４校の校内研修の年間予定をGoogleドライブ上で共有し、授業の相互参観を活発に行い、互いに学び合う風土づくりを築いた。講師を招いて合同研修会を実施するなど、好機を捉えて教員の学びの場を設定している。

イ 武雄市ICT支援員との連携

武雄市ではICT支援員が各学校に１名配置されており配置時数も多い。そのため教頭が中心となってICT支援員の役割をマネジメントしていくことで学校全体のICT活用能力が向上し、効率的な学校運営もできる。「どのような業務をお願いするか」「教職員との効果的な連携」「授業支援の体制づくり」「教職員とICT支援員との研修会」「個人のICT活用スキルアップの補助」など各学校の実態に応じた取組が行われている。

(2) 主に生徒指導に関わる副校長・教頭の役割について

【中学校の実践】

① 実践内容

生徒指導と教育相談において、ケース会議を通じて困難を抱える生徒への支援体制、情報共

有、外部機関との連携に取り組んだ。また、若手教員の育成を図り、学校全体の指導力向上と組織体制の向上を図っている。これにより、生徒や教職員の支援体制を構築し、安心して学べる環境を整えた。

② 副校長・教頭としての関わり

ア 教職員の成長を促す支援体制の構築

教職員が自身の専門性を生かし、生徒のためにより良い実践を行えるよう、積極的に支援する。

特に、若手教員の成長を重視し、意欲を引き出し、行動変容を促すための支援体制を構築する。

イ 組織全体の活性化とアイデアの共有

教職員一人一人の優れたアイデアを尊重し、それらを学校全体に共有することで、教職員が互いに協力し、組織全体が目標達成に向けて取り組むよう促す。教職員が互いに学び合い。高め合う風土を醸成し、より効果的な教育活動を実現することを目指す。

ウ 外部機関との円滑な連携

生徒の困り感を把握している教職員と外部機関との連携を円滑にし、迅速に問題解決できるよう促す。

～支援体制の取組の工夫～
【組織化】時間設定をしたケース会議
【情報共有】校務分掌を機能させる定例会議
【外部機関】武雄市子どもの貧困対策・笑顔コーディネーターとの連携
【若手育成】月２回のミニ研修の実施

【資料２】教頭としての関わり

③ 具体的な取組

ア 若手教員の育成

チームビルディングとは「自立した人たちがそれぞれの強みを生かして、一緒に楽しく目的・目標を達成するための団づくり」である。校内でその「自立した人」を育て、それぞれの強みを今の学校で発揮してもらうために若手育成に力を入れる。月に２回程度、朝会や職員会議のときに学級経営・教科経営資料を配ってミニ研修を行い、生徒指導のスキルや学級の集団づくり、授業づくりの力が向上することを願っている。

イ ケース会議

困っている生徒（または保護者）の問題を解決するために、養護教諭の積極的な呼びかけにより適宜実施した。校内の関係教員やSSW、武雄市子ども家庭課職員、当該生徒の保護者に参加を呼び掛けた。養護教諭へは主体的に動いてケース会議を開いたことを価値づけしてフィードバックし、意欲づけた。また、ケース会議の持ち方が非常に建設的であったため、校内でそのやり方を周知させた。また、ケース会議の設定と時間確保などを支援した。

ウ 子どもの貧困対策

月一回の笑顔コーディネーターとSSWと教頭、特別支援教育コーディネーターとの会議を行っている。靴や着替えがないので学校に登校することができない現状や、経済的な問題で就学できない、進学できないという問題を解決する目的で話し合いや支援の依頼をしている。令和５年度は就学支援や奨学金制度の紹介や申し込みの支援を依頼した。笑顔コーディネーターを通じて「一般社団法人おもやい」につないでもらい、食品や日用品等の支援を受けた。

【写真３】 おもやいからの支援物資

(3) 主に教育相談に関わる副校長・教頭の役割について

【小学校】

① 実践内容

教職員一人一人が高い志を持って教育活動に励んでいる中、「不登校児童への支援」「いじめに関する対応」「特別支援教育の推進」など多くの課題がある。学校の情報の窓口を担う副校長・教頭として、チームの支援体制を構築していく必要がある。そのために教職員や外部専門機関との連携を図り、組織的な支援体制を目指し、課題解決に向けた取組を推進した。

② 副校長・教頭としての関わり

ア 教職員とつながる

教職員の困り感を共有し、支え合う支援体制づくりを目指す。

イ 役割をつなげる

教職員の役割を明確にし、校内の支援体制を充実させる。

ウ 外部専門機関とつながる

児童や保護者の実態や願いに応じて専門機関と連携する。

③ 具体的な取組

ア 教員が相談しやすい環境づくり

保護者対応や学級経営の悩みなど多くの課

題が窓口となる副校長・教頭へ集中する。早急に対応すべき優先順位を決めながら情報を整理するようにした。特に配慮したのは、「教職員の様々な悩み」に対し、「何でも話せる人」として教職員の話を傾聴し、真摯に受け止める姿勢をもつことだった。まずは「自分の悩みや辛さを話せる職員室の雰囲気」「お互いに支え合う教職員集団」を目ざすことを重要とし、教職員の困り感を傾聴する時間をもつことを心がけてきた。日頃より「辛さや弱さをさらけ出せる関係」を目指し、安心感がもてるカウンセリングの力量を高めていくことが重要であると感じている。

イ　学校教職員との連携

欠席連絡・教室に入れない児童の対応・生徒指 導関係の問題など、教頭を中心に情報が入る。副校長・教頭が「学校の窓口」として様々な情報を把握し、校長を含め担当者に伝える。いろいろなケースがあり、児童一人一人の特性や状況によって対応する教職員も異なる。校長の指導やケース会議の支援内容を受け、「実現できそうな目標をたてること」「状況を見ながら当面の目標を改善していくこと」を念頭に置き、個に応じた対応を図ってきた。

本人や保護者の思いを尊重し、本人ができることから始めるようにしている。なかなか登校ができない児童に対して、保護者と相談しながら登校できる時間を決めて可能な限り学校とつながるようにした。また、朝からなかなか教室に入れない児童に対して、保健室で約束の時間を児童と一緒に決め、時間になると教室へ入って学習をするようにした。さらに、登校はできても教室に入れない児童は学校職員全体で状況を把握し、学習できる態勢が整うよう居場所を確保し、その確認とルールを共有した。担任は授業や児童対応のため支援の必要な児童との関わりが難しいときがある。よって教育相談担当（養護教諭）と教頭が中心となって対応策を講じてきた。また学校には教員以外にもいろいろな職種の人々がおりその視点で児童と関わりをもち関係性も生まれる。武雄市職員（笑顔コーディネーター・学校図書事務・学校用務員・学校生活支援員）の声かけや励ましから自分らしさを発揮する児童もたくさんいた。「担任・教育相談担当・特別支援教育コーディネーター・養護教諭・生徒指導担当等」の個々の役割の分担を明確にし、組織的なチーム力の構築が重要であると感じている。

（教育相談に関する支援会議）
・児童の行動の背景を明確にする。
・児童ができそうな当面の目標を設定する。
・児童が安心できる校内支援体制を築く。
・教職員の役割について確認する。
・児童の想いや保護者の願いに寄り添う。
・児童や保護者の成長を支援する。

【資料３】　話し合いで大切にしたこと

ウ　外部専門機関との連携

専門機関との連携が必要な児童の場合、個に応じた対応を行ってきた。児童の実態や家庭での様子を保護者と相談しながら把握し、SC・SSW・県の専門相談機関・教育支援センター・武雄市子ども家庭課子育て相談係・医療機関等と連絡を取り合いながら児童・保護者の支援を行っている。また、学校在中（週３日ほど勤務）の笑顔コーディネーターと連携し、保護者との関わりや市の相談機関とのつながりをもつようにしてきた。

外部専門機関との連携を図り、教職員と常に情報を共有するようにし、校内組織の支援体制をサポートしていくことが大切である。

６　研究の成果と課題

(1)　成果

・小中連携を意識したよりよい支援の在り方について情報共有をしながら取り組むことができた。
・各学校の実践を共有することで、自校の自発的・主体的な教育活動に生かすことができた。

(2)　課題

・学校の実態に応じて、支援体制は異なるが、各学校での取組のよさや課題などを協議し、武雄市の教育環境においてどのような組織マネジメントができるのかをさらに深めていく。